

アクティブラーニングにおける 学習評価の課題と対策

自己肯定感を高める評価とは

炭谷 俊樹¹ 矢萩 邦彦² 大日向 百樹³

¹正会員 神戸情報大学院大学 学長
(〒650-0001 兵庫県神戸市中央区加納町2-2-7)

E-mail:sumitani@kic.ac.jp

²正会員 教養の未来研究所・株式会社スタジオオアフタモード

³正会員 cst:communication skills training

初等中等教育の新学習指導要綱では「主体的、対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を多面的に評価する手法が求められている。しかしながら現在検討されている手法の多くでは学習者の自己肯定感を下げってしまう可能性が高く、アクティブラーニングでの阻害要因となることが懸念される。

本稿では、検討または実践されている学習評価の学習者の自己肯定感への影響について考察し、自己肯定感をこれを高めるような評価はどうあるべきかについて論じる。著者らが実施してきた具体的な事例を紹介し、今後検証したい学習評価の仮説モデルを提示する。

Key Words : active learning, inquiry-based learning, self-esteem, learning assessment

1. 背景と問題意識

初等中等教育における2020年以降の新学習指導要綱が発表された。この実現に向けてのカリキュラム改革とともに、学習者である生徒・児童の学習評価をどのように行うかが重要な課題となっている。従来型の知識の習得をペーパーテストで確認する手法ではなく、「主体的、対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を多面的に評価する手法が求められている。

一方、自己肯定感に関する問題意識は、内閣府の「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査¹⁾」でその低さが話題になって以来、流行的に高まっている。しかし、議論され提案されている対策の大半は教師や保護者など他者が評価して自己肯定感を高めるサポートをするというもので、自分自身による振り返りには焦点が当たっているとは言い難い。

文部科学省の中央教育審議会以自己肯定感が注目されるようになったきっかけは、2004年6月に起きた長崎県佐世保市女子児童殺害事件であり、以降日本の子どもの自己肯定感の低さについて繰り返し議論されている。2008年～2012年に「東京都教育ビジョン（第2次）」内の推進計画のひとつとして「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」が挙げられ、『自尊感情

や自己肯定感に関する研究について』（東京都（慶應義塾協力））5カ年に渡る研究が行われ『自己の成長を振り返る学習』についても言及されているが、最終的に「他者評価シート」の運用に研究の焦点が移ってしまったという経緯がある。これは、調査対象の中心である小学生において、他者評価の方が調査成果が出しやすいことが原因の一つだと考えられる。

また、「教育の質保証」「アカウンタビリティ」が求められる中で、客観的な評価が重視されるため、主観的になる自己評価は重視されないことも原因と考えられる。

現在様々な学習評価の手法が検討または実践されているが、その多くが学習者の自己肯定感を下げる要因となりうるものであり、アクティブラーニングの阻害要因となることが懸念される。以下では学習評価の学習者の自己肯定感への影響について考察する。

2. 学習評価と自己肯定感

学習評価を、評価の目的、学習目標設定、評価・フィードバックの手法、学習の進め方の4つの要素に分解し、それぞれのパートの自己肯定感への影響について考察する。

	自己肯定感を下げることにつながる方法	自己肯定感を上げることにつながる方法
評価の目的	学校側・指導側のパフォーマンスを評定するため 学習者を競争させ序列化・選別するため	学習者が個々の特徴に応じて成長するため
学習目標設定	目標は上から与えられ、学習者本人の選択の余地はないか限られている 学習者の興味関心のない目標設定がされる	目標や評価軸を学習者本人が検討できる 学習者に興味関心のある目標設定がされる
評価・フィードバックの手法	定量評価のみ 教員による評価のみ	定性評価のみ、定性と定量の併用 自己評価・ピア評価
学習の進め方	学習の結果のみを評価する できていないことを指摘するが、どうすれば改善できるかを学習者本人が理解できない 学習者の個性・特徴を無視して枠にはめるような評価 教員が進め方を逐一指示し、失敗や回り道をさせない	学習経験(プロセスや結果)を学習者がストーリーを語りシェアする 学習者自身が自らできていることできていないことを把握し、次に自分がすべきことできることを理解する 学習者の特徴が生かされ、個性がプラスに生きる評価 学習者自身が工夫する機会、自己表現する機会が豊富にある。試行錯誤できる。

図-1 学習評価の自己肯定感への影響

(1) 評価の目的

そもそも何のために学習評価を行うのか、教育の質保証やアカウンタビリティが求められる中で、学校側、教員側のパフォーマンスを評価するために行われる場合も多い。この場合は、客観性、定量性が求められ、以下の要素の考察でも見られるように、学習者の成長と離れた評価となり、自己肯定感を低めるリスクが有る。学習者の特徴に応じた成長を目的とする評価のほうが望ましい。

(2) 学習目標設定

学習目標が学習者本人の興味に関係なく、本人の意志による選択が認められない場合には、学習者は学習に興味を感じることができない。学習者自身が目標や評価軸を検討し、学習に興味付けをすることが望ましい。

(3) 評価・フィードバックの手法

定量評価及びこれに基づく学習者へのフィードバックは、「何かができている」というメッセージだけが伝わり、自己肯定感を失う。「どうすれば改善できるか？」を学習者が自ら理解し、振り返る評価が求められる。さらに学習者の特徴や個性が尊重される評価が自己肯定感を高めることにつながる。

(4) 学習の進め方

教員が学習の進め方を逐一指示するやり方では、学習者の本当の学ぶ喜びは得難い。学習者が自ら学び方を工夫し、試行錯誤し、失敗を乗り越える経験をするところから本当の達成感が得られる。

全体として、知識偏重型の教育で見られた、定量評価、客観的評価にこだわる限り、カリキュラムの中身をアクティブ・ラーニング型にしたとしても、ほんとうの意味での学習効果は得られず、むしろ自己肯定感を低めることに陥りがちである。

3. 自己肯定感を高める評価の実践事例

自己評価を高める学習評価の実践について、筆者らがこれまでに実践してきた事例を以下紹介する。

(1) ラーンネットグローバル・スクール⁷⁾での学習評価

神戸市の「ラーンネット・グローバルスクール」は1996年より小中学生を対象に探究型のアクティブラーニングを中心にカリキュラムを実施している。その教育評価の特徴を図2にまとめた。

これに見られるように、点数による定量評価は行わず、前項で述べた自己肯定感を上げるタイプの学習評価が実施されている。

	自己肯定感を上げることにつながる方法	ラーンネットでの実践
評価の目的	学習者が個々の特徴に応じて成長するため	学習者が個々の特徴に応じて成長するため
学習目標設定	目標や評価軸を学習者本人が検討できる 学習者に興味関心のある目標設定がされる 学習者が自ら目標に興味付けをする	「プロジェクト学習『とことん』」では子ども本人がテーマや目標を設定する
評価・フィードバックの手法	定性評価のみ、定性と定量の併用 自己評価・ピア評価	学期に一度アセスメントレポートを作成、各科目での学習状況を教員から保護者および本人にレポート プロジェクト学習・テーマ学習のアクティブラーニング科目について、他の子どもからのフィードバックを受ける
学習の進め方	学習経験(プロセスや結果)を学習者がストーリーを語りシェアする 学習者自身が自らできていることできていないことを把握し、次に自分がすべきことできることを理解する 学習者の特徴が生かされ、個性がプラスに生きる評価 学習者自身が工夫する機会、自己表現する機会が豊富にある。試行錯誤できる。	毎学期の「探究シェアリング」にて各自が自らの探究学習の成果を他の子供や保護者と共有することを通じて学びを深める アクティブラーニング系科目では「振り返り」を行い、うまく行ったことや改善できる項目を子供自らが考える 上記の評価において、それぞれの子どもの特徴がプラスに評価されている 各クラスにおいて子どもが様々な手段で自己表現する機会が豊富にある

図-2 ラーンネットに於ける学習評価

(2) 知窓学舎⁸⁾の「意味づけ振り返りメソッド」

横浜市の「知窓学舎」では「意味づけ振り返りメソッド」と呼ばれる学習評価が実践されている。

効果的に振り返りを行うためには、活動自体や目的を見直すだけでなく、それらを自分事として、また社会事として捉え直すことが効果的である。そのためには、個人的な意味づけと社会的な意味づけがそれぞれ必要である。また、別軸として内的なモチベーションと外的なモチベーションのバランスをとる必要もある。

振り返りに要する時間が長くなりすぎないことも重要である。カリキュラムを圧迫しないためにも、振り返り自体にストレスがないようにするためにも、5分～10分程度が理である。因果や相関を論理的に言語化することで自己理解を促進することも目的の1つなので、文章として残すことが必要だが、時間に余裕があれば振り返りの前後で2人組で対話によるリフレクションなどを行うと、さらに効果的である。

『意味づけ振り返りメソッド』（10分）

- どんな目的があったと思うか
 - それは自分にとってどんな意味があったと思うか
なぜそう思うのか
- 10段階（1が最も意味を感じられなかった、10がとて

も意味があると感じた) で表すといくつか
●自分がそれをした(知った) ことで社会的にどんな意味があると思うか

なぜそう思うのか

10段階(1が最も意味を感じられなかった、10がとも意味があると感じた) で表すといくつか

講師がチェックするのは、数値の変化となぜそう思うのかに書かれていることの論理性のみである。飛躍が大きい場合はなぜそう思うのかをさらに問う。

以上の方法による事例として、多くの生徒が、自分事(成績・成長・楽しいなど自分にとってメリットがあること)として捉えたときに意味を感じていたが、社会的な意味を高く感じた生徒からは「自分のためだったら別に頑張らなくても良かったけれど、社会のためになるなら頑張ってみようと思った(小6・男子)」という感想が挙がった。つまり、自己肯定感の感じ方は、個人的な意味づけがきっかけとなる場合と、社会的な意味づけがきっかけになる場合が考えられる。

(3) 「cst」での実践事例³⁾

「cst」では子どもの論理的コミュニケーション能力を高めるトレーニングを実施している。

子どもは言いたいことがあってもそれがうまく伝わらず、他の子供や教員に誤解を受けたり場合によっては揶揄されたりすることで、自己肯定感が低くなっていることがある。

そこでコミュニケーションの練習を通じて、自らの考えを整理し、更に人にわかりやすく伝える事ができるようになることで、自己表現して理解してもらい楽しみが増え、自己肯定感が高まる事例が多く見られる。

本人の努力に加え、聞く教員や周囲の子どもも、本人の特徴をよく理解し、かつ前向きに捉える態度があるときに、更にこの効果は増す。

4. 学習評価モデルと検証

以上の考察を踏まえ、学校などの現場で用いることのできる汎用的な学習評価モデルの仮説を作成中である。

このモデルを用いて、自己肯定感を測定している学区にて実証実験を行う予定である。

5. おわりに

知識偏重型から探究型・アクティブラーニング型への学習の変化が時代の変化から求められていることは間違いない。しかしながらカリキュラム内容が変わっても学習評価の手法がこれまでの定量型・客観型の発想から打棄却しない限り、新しいワインを古い革袋に入れる事になりかねない。子どもたちの自己肯定感の向上につながる学習評価方法の検討と実践が求められている。

参考文献

[1] 内閣府: “平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査”, pp.5-43, 2014.

[2] 内閣府: “平成 26 年版 子ども・若者白書”, pp.79, 2015.

[3] 松井香奈: “小学校における自己肯定感を高める教育実践の検討-実践研究論文を手がかりとして-”, 武庫川女子大学大学院 教育学研究論集 第 12 号, pp.47-55, 2017.

[4] 東京都教職員研修センター: “自尊感情や自己肯定感に関する研究--幼児・児童・生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導の在り方”, 東京都教職員研修センター紀要(8), pp.3-26, 2009.

[5] 西岡加名恵・石井英真・田中耕治: “新しい教育評価入門人を育てる評価のために”, 有斐閣, 2015.

[6] Sue Fostaty Young・Robert J.Wilson: “「主体的学び」につなげる評価と学習方法 カナダで実践される ICE モデル”, 東信堂, 2013.
(2017.. 受付)

[7] ラーンネット・グローバルスクール ホームページ
<http://www.L-net.com>

[8] 知窓学舎 ホームページ
<http://www.chisou-gakusha.jp/>

Learning Assessment models and their Effect on Learners' Self-esteem.

Toshiki Sumitani¹, Kunihiro Hahagi², Momoki Obinata³

1 Kobe Institute of Computing, Graduate School of Information Science

2 Institute of the future of Liberal Arts, Studio After-mode

3 cst: communication skills training

We discussed effects of learning assessment models in the active learning environment on learners' self-esteem. Traditional assessment models based on numerical and objective criteria could have negative

effect on self-esteem. We propose alternative assessment models to enhance learners' self-esteem.